

はじめに

現在の和歌山県農業・農村の形を作ってきたのは、県内各地の農家、農業技術者(農業改良普及員、生活改良普及員、営農指導員ほか)、JAや行政の担当者、試験研究担当者などの地道な活動である。しかし、その方々が年を重ねられ地域の農業や農政の歴史を聴くことが困難になりつつある。「今、書き留めておかないと消えてしまう」といった危機感を抱いたことが、本書編さんの大きな理由である。

地域農業の歴史は地域固有の資源であり、それを整理し様々な分野で活かしていくことが求められている。我々は、和歌山県農業展開の歴史を知り、それを県農業の将来に活かすことができればと考え、一昨年度『和歌山県農業展開史』を発刊した。しかし、短時間で作成したこともあり、県農業・農政を全体的かつ網羅的に考察・記述できていなかった。この反省に基づき、より充実した県農業展開史を編さんしようと、本年度約1年間をかけて県農業・農政に関した研究会を重ねてきた。研究会では大学内外から集まった24名の執筆者で活発な議論が交わされた。本書はこうした取り組みの成果である。

本書は、最近の我が国と和歌山県の農業・農政の動向について述べた「第I部 農業・農政の動向」、県試験研究機関および農業改良普及事業の取り組みと農業情報利用の展開を述べた「第II部 技術開発・普及・情報利用の展開」、園芸作物などの産地形成の歴史をまとめた「第III部 園芸作物などの産地展開」、農産物直売所や農家民泊、県内への移住・定住といった県内農村の新たな動きを紹介した「第IV部 都市農村交流と移住・定住の動向」の4部19章で構成されている。

各章の内容を簡単に紹介すると次のとおりである。

第1章では、2000年以降の日本経済・社会の動向を明らかにしたうえで、日本農業の基本動向と食料・農業・農村基本法の制定に伴う農業政策の展開について言及している。

第2章では、2000年以降の和歌山県農政・農業の動向と特徴を整理し、『長期総合計画』の目標実現に向けて取り組まれている県農政の現況と特徴、県農業・農政をめぐる課題について言及している。

第3章では、和歌山県農業試験場および農業試験場暖地園芸センターで取り組まれてきた野菜、花き、水稻に関する試験研究に関して、両機関の沿革、品種育成や技術開発、現場との関わりなどをまとめている。そして、今後の試験研究の方向についても考察している。

第4章では、和歌山県果樹試験場で取り組まれてきたカンキツの主要な試験研究の成果について産地発展の段階とともに整理し、今後の研究方向についても言及している。

第5章では、国と県との協同で実施されてきた農業改良普及事業について、これまでの活動の推移、活動方式の変化を紹介するとともに、今日取り組まれている特徴ある普及活動や今後の課題について言及している。

第6章では、農業改良普及事業とは車の両輪に例えられる生活改善普及事業の展開について、令和元年10月に開催した元生活改良普及員座談会の記録をもとに、生活改良普及員として取り

組んだ活動の報告とその後のクロストークを収録した。

第7章では、1980年代以降に農具の仲間入りをしたといわれるパソコンを活用した農業情報化の展開について整理するとともに、今日提唱されているスマート農業の展開方向についても検討している。

第8章では、和歌山県農業の地域性に関して地域別の特徴的な生産動向を紹介するとともに、出荷・販売対応の特徴やブランド認証制度、6次産業化の取り組みなどについても言及している。

第9章では、和歌山市の野菜産地、そのうちでも特色ある野菜生産が展開している砂地地帯を主な対象として、栽培作物の変遷や主要な品目であるダイコン、ショウガ、ピーマンの動向をまとめている。

第10章では、和歌山県産野菜のなかで作付第1位である未成熟エンドウについて、日高地方を中心にエンドウ産地の展開過程と産地の取り組みを整理している。

第11章では、2000年以降のウメ産地の動向について、需給動向、流通実態、川中と川下の変化、グリーン・ツーリズムや世界農業遺産の認定などの新しい産地の動きなどを紹介している。

第12章では、本県が全国第1位であるカキ生産について産地の展開を時代区分し、その時代の特徴を述べるとともに、現在の産地が抱える課題と今後の展開方向について検討している。

第13章では、本県が全国の66%を生産し、「しびれ」ブームで需要の高まりが予想されるサンショウについて、これまでの利用の歴史や和歌山県の栽培の歴史を紹介している。そして、現地調査結果をもとにサンショウの流通チャンネルや産地の抱える課題についても言及している。

第14章では、特用林産物であるシュロについて、海南産地の形成を中心に栽培・利用の歴史的過程を整理するとともに、シュロ産業から派生した家庭用品産業の動向についてもまとめている。

第15章では、和歌山県で栽培されてきた伝統食品の素材や工芸作物などについて、それらの栽培面積や収穫量の変化と栽培の歴史をまとめている。そして、これらの作物が地域の気候風土に合致し質の良いものが収穫できることから、体験農業などでの利用を提案している。

第16章では、県内農産物直売所のこれまでの展開を整理するとともに、JA紀の里めっけもん広場でこれまで複数回行った生産者と消費者へのアンケート調査結果をもとに出荷者と消費者の意識などの変化を検討している。

第17章では、和歌山県における体験教育旅行の取り組みの歴史を整理するとともに、県内では先駆的事例として注目されるゆめ倶楽部21、南紀州交流公社、いなみかえるの宿の活動について詳細に分析し、今後の課題についても言及している。

第18章では、和歌山県の移住・定住施策の背景と施策展開の歴史、そしてその実績を紹介するとともに移住者を受け入れる側の農村コミュニティの課題について言及している。

第19章では、農山村への移住・定住について、県内にみられる思想的帰農移住(那智勝浦町色川地区)、定年移住(日高川町旧中津地区)、地域農業・生業の担い手となった移住(紀美野町)の3パターンを取り上げ、具体的な移住者の「歴史」を紹介している。

本書を作成するにあたり、和歌山大学名誉教授 橋本卓爾先生、和歌山大学客員教授 湯崎

真梨子先生、大阪商業大学特任教授 大西敏夫先生には、研究会にご参加頂くとともに種々ご指導賜り、さらに第1章、第19章、第2章をそれぞれご執筆頂いた。また、向井元治氏(元和歌山県農大学校長)、佐々木茂明氏(元和歌山県農大学校長)には研究会で貴重な県職員時代の経験をご報告頂くとともに第5章と第7章をそれぞれ執筆頂いた。また、第6章の元生活改良普及員座談会では、元和歌山県農林水産部専門技術員である中谷多嘉子氏、東祥子氏、土橋ひさ氏に生活改善普及事業の取り組みをご報告頂き、玉置美保子氏(元和歌山県農林水産部専門技術員)にも自らの経験を寄稿頂いた。

島津康氏(和歌山県果樹試験場長)と島浩二氏(和歌山県農業試験場栽培部長)には試験研究の歩みを、阪井加寿子氏(和歌山県企業立地課長)には移住・定住施策の動向を、芝めぐみ氏(和歌山県果樹園芸課副主査)には体験教育旅行の展開をそれぞれご報告頂き、第3章、第4章、第18章、第17章をご執筆頂いた。さらに、学外からは池田信義氏(JAわかやま営農生活部)、光定伸晃氏(和歌山県伊都振興局農業水産振興課長)、森敏紀氏(和歌山県果樹園芸課産地振興班長)に共同報告者・執筆者としてご参加頂き、第9章、第12章、第16章をそれぞれ執筆頂いた。学内で食農総合研究所関係者以外では、経済学部准教授 藤田和史氏、観光学部特任助教 藤井至氏にご参加頂き、第14章と第13章をそれぞれご執筆頂いた。

玉置美保子氏、石橋旦子氏、和歌山県農林水産部、JAわかやま、日高地域農業改良普及センター普及事業50周年記念誌編集委員会、南紀州交流公社、那智勝浦町、ゆめ倶楽部21、米づくり塾の皆様からは貴重な写真の提供を頂いた。このほかに現場でのヒアリング調査や資料・データ収集などに対して多くの農家の皆様や県、市町村、JAなど関係機関の現職、OBの皆様にも多大のご協力を賜った。

このように本書は学内外の多くの皆様のご協力によってできている。以上、記して深く感謝申し上げます。

本書では前回取り上げることができていなかった2000年以降の農業・農政の動向、技術開発・普及・農業情報利用の展開、個々の農林産物や地域の産地形成の歴史のほかに、農村生活の変化や都市農村交流、移住・定住といった新しい県内農村の変化と対応についてもまとめている。まだまだ不十分のところが多く、当初目標とした全体的かつ網羅的な考察・記述もできていない。より内容豊かな和歌山県農業展開史の編さんを目標に今後も取り組みを継続していきたいと考えている。

本書の内容が和歌山県農業・農政展開の歴史を知り、県農業の将来を考えるとときの参考となれば幸いである。

令和2年3月

執筆者を代表して

和歌山大学食農総合研究所 辻 和良